

平成 27 年度 研究成果報告書  
Research Achievement Report FY2015

Date:

言語社会専攻長

日本語・日本文化専攻長 殿

To Dean of Studies in Language and Society

To Dean of Studies in Japanese Language and Culture

講座名・職名 Course Title・Job Title	アジア I・准教授
氏名 Name	小西敏夫
専門分野 Academic Field	朝鮮語学

主たる研究テーマ Principal Research Subject	積譜詳節、月印千江之曲及びその原典における言語表現の違いについて
<p>1449年に刊行された『月印積譜』の第13は、『法華経』の第4「信解品」を朝鮮語に訳したものである。『法華経』は、初期大乘仏教経典『サッドルマ・ブンダリーカ・スートラ』が漢訳されたものである。この『法華経』は、1463年に刊行された『法華経諺解』においても、朝鮮語に訳されている。すなわち、『法華経』の「信解品」の朝鮮語訳は、『月印積譜』第12と『法華経諺解』巻2の二つの文献に表れているのである。</p> <p>今年度は、『法華経』の「信解品」の朝鮮語訳が、上の二つの文献において、どのように異なった言語表現として表れているかに注目した。『法華経諺解』巻2の方では、原文である『法華経』の漢字語がそのまま使われているのに対し、『月印積譜』第13の方では、それを固有の朝鮮語に訳しているものが多かった。たとえば、『法華経』や『法華経諺解』巻2では、「未曾有」、「歓喜踊躍」、「二十年中」、「一心」となっているものが、『月印積譜』第13の方では、「むかしになかったこと」、「よろこびとびあがり」、「にじゅうねんのあいだ」、「ひとつのころ」などとなっているのである。しかし、逆の場合もあり、『法華経』と『月印積譜』第13では「遊戯」、「歓喜」、「使者」、「即時」などの漢字語で表れているものが、『法華経諺解』巻2の方では、「あそびあるく」、「よろこび」、「つかうひと」、「すぐに」などの固有語で表れていたりもする。量的には前者の方が多く、『法華経諺解』巻2の方が、『月印積譜』第13よりも、原文である『法華経』の直訳に近いとすることができよう。</p> <p>『法華経』の「従地而起」が『法華経諺解』巻2の方では「じめんに従っておき」、『月印積譜』第13の方では「じめんよりおき」となっており、『月印積譜』第13の方が朝鮮語としてこなれた表現であるように思われる。『法華経』の「念」が、『法華経諺解』巻2の方では「この念をして」となっているのが、『月印積譜』第13の方では「おもうに」となっていることから、同様のことが言える。けれども、『法華経』の「咄」が『月印積譜』第13の方ではやはり「咄」であるのに対し、『法華経諺解』巻2では「おい」と訳されており、この場合は、『法華経諺解』巻2の方がこなれた朝鮮語であると言えるのではないと思われる。</p> <p>それから、用言の否定表現が、朝鮮語には長い形と短い形があるが、『法華経諺解』巻2の方では長い形の方が表れるのに対し、『月印積譜』第13の方では短い形の方が表れていたが、これは昨年調べた『法華経』の「方便品」を訳した『法華経諺解』巻2と『月印積譜』第12の対象においても表れた。</p> <p>引き続き、『法華経』が訳されている他の文献についても当たってみる予定である。</p>	